

4. 好きな言葉

コツコツ歩いていくこと……

越智康夫氏は、自らのタオル人生を振り返って、「皆さんにかわいがってもらったな」と改めておもう。「世の中には辛いこともあるけど、あんまり空ばかり向かずに、うつむきながらでもコツコツ歩いていくことは大切やね」と言う越智氏は、どんな難題に遭遇しても逃げることなく、また手を抜くことなく、ひたむきに取り組んできた。そのひたむきさがあって、「皆さんにかわいがってもらった」のである。

若い頃はたくさんの現場を渡り歩いてきたが、それは「生きるため」、そして「時代に残されずについていくため」に必死だったからだ。越智氏には戦争の貧しい辛い記憶がつねにある。食うものも十分になく掘っ立て小屋で過ごした鈍川村での幼少時代。これが越智氏の原点であり、「いつか楽をさせてあげたい、楽をしたい」という強い思いが、いつも高みを目指して貪欲に技を修得してきた理由である。

越智氏は生涯で2つの家を建てた。最初の今治市日吉町に建てた小さな家と今住んでいる家である。独立したときにいちどだけ家族に迷惑をかけたが、綿織物業界の「トラブルバスター」として多くの人助けをし、家族を養ってきた。越智氏は、腕一本でタオル人生をコツコツ歩いてきたのである。

60歳で現役を引退した越智氏は、引退後の20年間を趣味のカメラでたくさんの写真を撮って楽しい時間を過ごしてきた。十八番は「風景写真」である。数年前に脊柱管狭窄症にかかり腰の手術をしてから歩行が困難になったが、それ以前の元気なときはよく山登りをして山野草や遠くの風景の写真を撮ったものである。そのときの写真は山ほどあるが、自分の写真はほとんどない。



2009年石鎚山にて



西条市にある石鎚神社中宮成就社にて



武家屋敷 野村家（石川県金沢市）にてケイ子氏とともに写った記念写真



越智氏が撮った風景画（しまなみ海道を眺む）

5. 若者へのメッセージ

先入観を捨てて、いろんなことを貪欲に学んでほしい

越智氏は、自らがそうであったように、タオルづくりにおいて「先入観を捨てて、いろんなことを貪欲に学んでほしい」とおもっている。たとえば、「縫製の仕上工程は女性がする作業だからやらなくてもいい」と考えるのではなく、いちどトライしてみる。トライしてみると、それなりにコツをつかみ、どのようにすれば効率的に作業ができるのかがわかる。つまらなく見える物事でもやってみると、それがスキルに繋がるときもある。越智氏が選択して歩んできた道である。

20歳を過ぎたら責任を持つこと

「若い人には、失敗を恐れず何でもやりたいことをしてほしいけど、20歳を過ぎたら責任を持つことは大切だね。それさえしっかりしていれば、今の時代だから何しても構わんとはおもうけどね。」若さは最強の武器であるが、責任を負うことでその武器はさらに強化される。責任を引き受けるからこそ、どのような問題に対しても真っ向から受け止める強さが越智氏にはあったのだろう。そして、「一生懸命しよったら、誰かがかわいがってくれる」のである。（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

今治市役所都市計画課編『今治市戦災復興誌』今治市役所、1971年。

越智齊『今治織物組合90年史』今治織物工業協同組合、1987年。

玉川町誌編纂委員会『玉川町誌』玉川町、1984年、632-633頁。

編集後記

越智さんのインタビューは、コロナ禍でギリギリまで調整をさせていただ

き、2020年8月4日（火）の午後2時にご自宅にて敢行。前回の豊田さんと同じくオンラインでのインタビューとなりました。

冒頭より漫談師のような軽快な語り口にユーモアを交えながら、越智さんは自らのタオル人生について順を追って語ってくれました。人生に苦勞は付きものですが、そんなことはどこ吹く風。越智さんのタオル人生はユーモアに溢れており、最初の3分の1の期間にタイトルを付けるとすれば、「さすらいのタオルびと」でしょうか。残り3分の2の期間も合わせると、「渡り鳥シリーズ：織機の音が流れる港町」といったところでしょうか。どこにさすらおうが、体力・気力・技を持って全力で人を助け、問題を解決すると、いつの間にか去っていく。越智さんは、そんなドラマのような、映画のようなタオル人生を歩んで来られました。

さすらうたびに職人としてバージョンアップしてきた越智さんは、どんな苦勞もユーモアに変えるセンスを持ち合わせています。だから、底抜けに明るい。越智さんの楽しい話は尽きることなく、あっという間の3時間でしたが、終始笑いが絶えませんでした。越智さんのことを思って浮かんだ歌、二曲。

さすらいもしないでこのまま死なねえぞ

さすらおう ♪□

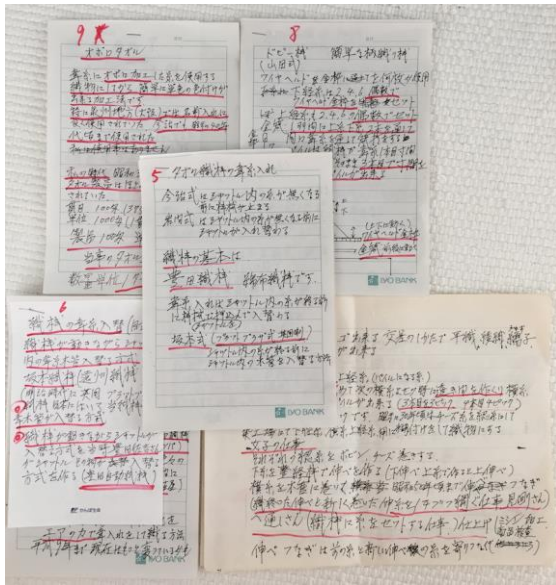
（作詞・作曲：奥田民生「さすらい」より）

思い出よ お前は俺の影なのさ 捨てるつもりがあるものか

旅がどこまで続いても 一緒に歩いてくるんだぜ □□

（作詞：西沢爽、作曲：狩林正一「口笛が流れる港町」より）

さすらいのタオルびとはどこまでも・・・。（辻）



この度のインタビューに合わせて、たくさんのタオル製織に関する知識をメモに書いて準備をさせていただきました。

今回の「タオルびと」

「タオルびと」の30人目は、初代タオルマイスターのひとりである阿部洋三氏である。タオル製織者として数々の表彰を受け、今治タオル業界の発展に貢献してきた。伝説のタオルマフラー「今治職人 洋三」の生みの親である阿部氏は、今は第一線を退いているが、後進の指導に熱心な活動をつづけている。その阿部氏に半世紀に及ぶタオル人生について語ってもらう。

